2008年適応行動論試験問題(解答)

●記述式問題 …略…

1)タカ・ハトゲーム

2)殺人に関する進化的・適応論的アプローチ

●マークシート問題

1．③ 社会ダーウィニズムの提唱者はスペンサー。④ハミルトンは血縁淘汰論で有名。

2．① 「②個性を形成する社会、文化要因は個人の外部に先験的に存在する。③文化はそれ自体が自律的な実体である。④文化を創り出すのは社会であって個人ではない」はすべて標準社会科学モデルの前提。

3．④ 大進化とは交配ができないほどの進化。小進化では交配可。

4．② 教科書p.34を参照。

5．④ 愚問

6．④ 退化も進化の一部。進化には目的がないことを認識しておこう。適応は万能ではないし、進歩でもない。

7．② ビクトリア湖は12,400年前に干上がった。シクリッドは湖の固有種であり、300種類に分化。

8．④ 形質変化に方向性はない。進化は無目的。

9．① 霊長類は、約200種いる。分布はおもに熱帯域である。夜行性も多い。

10．不明。 2007年問26と矛盾していると思う。

11．④ 一般に、足の把握力のほうが、手の把握力に比べて優れている。樹上生活をし、平爪を持つ。

12．③ テナガザルは一夫一妻。オランウータンは単独。ゴリラは一夫多妻。チンパンジーは複雄複雌。

13．

14．② 「樹上生活をするから新皮質がよく発達している」は誤り。リスだって樹上生活している。

15．③ 直感像記憶である。一瞬提示された数字を順番にあてていける。

16．③ マキャベリ的知能仮説とは、霊長類の脳の進化の原動力は、社会関係の操作(他者の行動・心理のモニタリングと予測、操作)にある、という説である。戦略的欺きなどが好例。

17．③ 150人

18．③ 猿人は大型類人猿大の脳を持ち、二足歩行していた。ヒトとチンパンジーの共通祖先は、今からおよそ600万年前に分岐した。人類がオーストラリア大陸まで広がったのは、約6万年前のことである。

19．② 猿人と比べて、男女の体格差が小さい。一夫一妻性に近かった可能性が高い。大型哺乳類を共同で組織的に狩猟していたかは、まだわかっていない。採集が主だったとする説もある。定住していたかも不明。握斧と呼ばれる様式化された石器が、世界の広い範囲から発掘されている。火を使用していた。人類で最初にアフリカからユーラシアへと進出した。

20．④ ネアンデルタール人の脳容量は、現生人類のそれよりやや大きい。埋葬の習慣があった。言葉を話していたと思われる化石の証拠がある。洞窟壁画は残していない。

21．② サピエンスは十数万年前に出現。狩猟採集が主。

22．④ 真社会性は、アリやハチ以外の生物(ハダカデバネズミなど)でも見られる。特徴は、世代重複。共同養育。生殖カーストとそれ以外のカーストに分かれる。(女王蜂と働き蜂等)

23．② ハミルトン則は、血縁者間に利他行動が進化する条件を示す法則である。rb－c＞0。rは血縁度。cは行為者が受ける損失。bは受け手が得る利益。

24．② はっきりとした血縁認識能力は、互恵的利他行動の進化条件として必須でない。

25．② 受益者となるためにはコストを払わねばならないことに人間の心は鋭敏である。